

イエメン共和国サナア地方における 人に対する通称について

佐 藤 道 雄

1. はじめに

親しい人に呼びかけるときや、そういう人について話の中で言及するとき、その人固有の愛称が用いられることがある。また人の悪口を言うときや人を罵ったりするとき、いわゆる「あだ名」が用いられることも少なくない。このように、ある社会集団の中で特定の個人を呼ぶために通常用いる本名以外の名をまとめて「通称」とここで定義しよう。一般的にアラブ社会では日本と比較して、通称は日常の会話で用いられる頻度も低く、種類もそれほど多くないというのが筆者の印象であるが、先日訪問したイエメン共和国のサナア地方には独特の一群の通称があるということを知ったので、ここで紹介したい。

2. 通称とそれによって呼ばれる人との一般的な関係

サナア地方で用いられている通称について触れる前に、まず、一般的にある個人が通称で呼ばれる場合にその通称がどのように作られるかという基準により、以下の4項目の分類が大雑把にできるのではないかと考えてみた。包括的・網羅的な分類を目指したものではないが、個々の事例のかなり多くが以下のどれかにおさまるものと思う。

ア. 本名から

日本語「マッチャン」(マツカワ から)、「ミッチャン」(ミチオ、ミチコ から)、「モー」(モトコ から)など。アラビア語 *ẓih* (女性の名 *ẓihān* から。エジプト)、*faṭṭūma* (女性の名 *fāṭima* から。イエメン南部)など。

また、日本語においては本名に用いられている漢字の他の読み方に基づいた通称もある(例えば「ガンチャン」が 岩田(イワタ) から作られたりする)。

イ. 共通した名をもつ有名人から

日本語「ブンチ」(「フクシ」の通称。彼の町の市長が 福士 文知(フクシ ブンチ)という氏名だったため)など。アラビア語 *'abu lgāsim* (「*gāsim* の父」の意。*muḥammad* と

いう本名の男性がイラクでこう呼ばれることがある。イスラム教の開祖 muḥammad の息子の名が qāsim (口語方言で gāsim) だったため)など。

ウ. 名前以外でその人に帰する特徴やできごとなどから

日本語「ジッチャン」(中学生なのに白髪が目立つ男子)、「デメ」(目の大きい女子)、「タモ」(学校で文章を読まされているとき「手綱」を「タモ」と誤読したこと)など。アラビア語 sāto ilkuskusi (「クスクスィ佐藤」の意。日本人の佐藤がクスクスィという食べ物にあたって腹をこわしたことによる)など。

アラブ社会では特に息子のいる女性を 'umm 'āmir (「'āmir のお母さん」)、'umm walīd (「walīd のお母さん」) などと、息子の名前を用いて呼ぶことが習慣化しているが、こういった方法もこの分類に入れられる。

エ. 本人の宣言による

本人が「私を....と呼ぶように」と言って自らの通称を宣言することにより、その人との関係が周囲に把握されないままに通称が定着してしまうことがある。

以上の4つの分類のうちアとイは特定の名前に帰する通称なので、その通称が用いられている社会の構成員ならば、当の本人を個人的に知らなくても何を根拠にそういう通称が用いられているのかが容易に推測できる類いのものである。一方ウとエは個人的な特定の事柄に帰する通称なので、それと呼ばれている本人の直接・間接の知人でもない限り、なぜそういう通称が用いられているのかわからないという類いのものである。

以上の分類基準が広く一般に通用し得るものならば、これから挙げるサナア地方の一群の通称には一般的とはいいがたい特徴がある。

3. サナア地方で用いられている通称

ここで紹介するのは筆者が1995年の夏にサナアで調べたもので、すべて男性の名(日本語の「氏名/姓名」の「名」の方)の代わりに用いられているものである。初めにどんな通称がどんな名の代わりに用いられるかをまとめて表で示し、その後で説明を加えたい。説明に際しては、Moshe Piamenta 著 'Dictionary of post-classical Yemeni Arabic', (Leiden, 1991) の記述でそれぞれの項目に関連する部分も、併せて紹介する。

通 称	本 名	通 称	本 名
a. jamāliy	← 'aliy	b. šarafiy	← ḥusayn/ḥasan
c. aṣṣafiy/aṣṣfiy	← 'aḥmad	d. 'uzziy/'izziy	← muḥammad

e. °imād	← yaḥyā	f. faḥriy	← °abd allāh
g. wajīh	← °abd almalik	h. ḍiyā'	← (本名のわからない人に対して)

a. jamāliy : °aliy という名の代わりに用いられる。

Piamenta によると、これに定冠詞が付いた aljamāliy や、同じ語幹を用いた aljamāl, jamāl al'islām, jamāl addīn, jamāl alma°aliy は °aliy と呼ばれる人に付与されるタイトル(title)であり、この用例は1706年の原典から1767年に書き写された文献にも見られる。(これら5つのタイトルのうち同文献で用いられているのがどれなのかは Piamenta は明らかにしていない。) これらの語のもとになる jamāl は、「感謝」の意。(pp. 73~74)

b. šarafiy : ḥusayn もしくは ḥasan という名の代わりに用いられる。šarafiy という語は姓としてイエメンに実在する。

Piamenta によると、これに定冠詞のついた aššarafiy や、同じ語幹を用いた šaraf addīn は alḥasan もしくは alḥusayn と呼ばれる人に付与されるタイトルである。また、1809年の文献に既にこういう用例が見られる。(p. 253)

c. aššafiy/ašṣfiy : °aḥmad という名の代わりに用いられる。aš- は定冠詞。

Piamenta によると、°aḥmad という名の人に付与されるタイトル。この用例は上記 jamāliy の場合と同様、1706年の原典から1767年に書き写された文献に既に見られる。(p. 284)

d. °uzziy/°izziy : muḥammad という名の代わりに用いられる。°uzziy/°izziy という語は、稀ではあるが、男性の本名として実在する。

Piamenta によると、°izziy というタイトルの用例も jamāliy, aššafiy の項と同様の文献に既に見られる。また、彼によると、°izziy/al°izziy はまた、šāliḥ という人(男性)に付与されるタイトルでもある。(p. 324)

e. °imād : yaḥyā という名の代わりに用いられる。

Piamenta によると、°imād というタイトルは1754年の文献に既に見られる。また、定冠詞の付いた al°imād は °aliy と呼ばれる人に付与されるタイトルでもある。(p. 340)

f. faḥriy : °abd allāh という名の代わりに用いられる。

Piamenta によると、faḥriy というタイトルは °abd allāh という人(男性)の名前の前に付けられる。(p. 368)

g. wajīh : ‘abd almalik という名の代わりに用いられる。

Piamenta によると wajīh は「著名な者」の意味で、‘abd arraḥmān もしくは ‘abd arraḥīm という人(男性)に付与されるタイトルであるとともに、qāḍiy(役職名)に呼びかける際にも用いられる。(p. 519)

h. ḍiyā’ : 本名のわからない男性に呼びかける際にのみ用いられる。

Piamenta によると、aḍḍiyā’ や ḍiyā’ addīn や ḍiyā’ al’islām は、maḥmūd もしくは ‘abbās もしくは hāšim という人(いずれも男性)に付与されるタイトルで、‘imād の項と同じ1754年の文献に既に用例が見られる。(p. 298)

最後のhは特定の個人や名前に付されたものではないという点で「通称」とは言い得ないが、a～g の通称と同じ用いられ方をするので、ここで取りあげることにした。例えば ‘aliy という名の人に呼びかけるときに yā jamāliyy「おい jamāliyy!」という表現が用いられるのと同様、本名のわからない男性に呼びかけるときにのみ用いられる(日本語で名前のわからない人に「おい、太郎さん!」と呼びかけるときの「太郎」とでもいったところか)。

(但し、本名のわからない男性に呼びかける際に用いられる表現はこの他にも多数ある。例えば、yā ‘uzziy (上記d参照。muḥammad はどこにでも見られる名前)、yā ra’īs「おい大将!」、yā aḥiy「おい兄弟!」など。)

4. 考察

以上の通称は、筆者の友人 ‘Abd albāriyy Ḥusayn Falāḥ氏、Sāmiyy alWazīr氏とその従兄弟の ‘Akram氏、‘Abd almalik Qāḍiy氏の4名からうかがったものである。4名ともサナア市または近郊の出身で二十歳代半ばの男性だが、覚えている限りの通称を挙げてもらって、前節の8例が明らかになった。

これらの通称は特定の名の代わりに用いられる。例えば muḥammad という名の人、誰でも ‘izziy/‘uzziy と呼ばれ得る。そういう意味では通称とそれと呼ばれる本人との関係に関して、上記第2節のア(本名そのものから作られる通称)、またはイ(共通した名をもつ有名人に関する通称)に分類されるように思われる。ところが、それぞれの通称と本名の間には音韻的な関連や共通した綴りなどが見られず、また例えば ‘imād yaḥyā やそれに類する名前の有名人がいるかといえ、誰もそのような人は知らないという。通称と本名との関係が把握されていないのに、どの通称がどういう名の代わりに用いられるかだけが広く知られているのである。

また、通称が指している本名が何であるかが Piamenta の記述と筆者の調べた結果とで異なるものもある(wajīh, ḡiyā’)。通称が確立してから長い時間が経っているので、いつの間にかそれが示す本名が入れ代わっても特に不思議なこととは思えない。その一方、多少の変化を被ったものがあるにせよ、18世紀から現在まで同一の名に対して用いられている通称が多いということは注目に値する(jamāliyy, aṣṣafiy, ‘izziy, ‘imād)。

同様に気になるのは Piamenta の用いている ‘title’ という語である。筆者(佐藤)が本稿で紹介している「通称」と Piamenta の記述している ‘title’ というものは、同一の用いられ方をしているのだろうか。筆者が調べた「通称」は、本名の代わりに用いられるものだった。ところが前節 f 項の faḥriyy における Piamenta の記述から、少なくともここでの ‘title’ は本名の前に加えられるものであることがわかる(原文 ‘preceding the name’)。つまり、‘abd allāh という人が faḥriyy ‘abd allāh と呼ばれるということである。このように通称が「枕詞」的に用いられた時期が長かったため(現代でもか?)理由のわからないままに本名と通称との関係が固定してしまったのかも知れない。

このように現段階では不明な点の多い「通称」であるが、最後にこれに関しての今後の課題を簡単にまとめて報告を終える。

- ・実際に用いられている通称は他にもっとないのか。
- ・どのような場合にどのような用いられ方をするのか。
- ・過去の文献ではどんなものがどのように用いられているのか。
- ・それぞれの通称と本名との間にはどんな関係があるのか。そういう関係には何か体系が見いだせるのか。

注

本報告の例示・引用に用いたアラビア語の音転写は、一般的な文献で慣用的に用いられているものである。また、基本的に音転写であるため、固有名詞でも大文字で始めている。Piamenta からの引用も同じ転写の方法で書き換えた。

本報告に関して、‘Abd albāriyy Ḥusayn Falāh 氏、Sāmiyy alWazīr 氏とその従兄弟の ‘Akram 氏、‘Abd almalik Qāḍiyy 氏にお世話になった。また、‘Amīn Muḥammad ‘Aqlān 氏とその御家族には貴重な助言を頂いた。謝意を表したい。